「語文研究」 1981 (vol. 51)

本や七巻本より古い形態を示しているように思われる。

(5)、第六群中の独自部分は、曽て存在した青蓮院本書入の「校本」の系統であり、その「校本」は尊円親王編纂の「正本」の可能性もあり、田村本は現在では孤本とはいえ、五巻本や七巻本の末流の本ではありえない。

(6)、七巻本系に近いが前後関係はありえないことは独自部分で分る。また五巻本とも一部密接な関係が推測できるものの遠い距離がある。それらの二系統よりは総じて成立段階が早いように思われるし、また末流本でもありえないので、拾玉集の成立段階を溯った時点の、しかも編纂次元が二系統とはやや異なった所に、田村本の成立上の位置付けをすべきであろう。

田村本の成立については以上のように考える次第である。しかし田村本がもし嘉暦本の系統にあったとしても、それが原初形態を保っているか否かについてはさらに究明しなければならない。

拾玉集の成立順序としては、慈円自撰家集、第一次編纂嘉暦本、第二次編纂貞和本、七巻本、五巻本二類、五巻本一類と成長していったのではないかと考えているが、詳細な考察はこれからである。そのような時に異本というべき田村本の出現は有益である。

〔註〕

1、本文は「支子文庫本『拾玉集』翻刻」として、福岡女子短大紀要、第十七号（昭54・6）より翻刻中。第二十二号（56・12）完了予定。

2、久曽神昇「広本拾玉集の紹介」日本文学史研究9（昭26）、石川一「早大本拾玉集の価値」「中世文学資料と論考」（昭55）

3、筑土鈴寛「異本拾玉集に就て」文学、二巻一号（昭9）で紹介され、一時行方不明になっていたらしいが、現在は神宮文庫に再び収められている。図書番号三ノ一二〇八。なお題簽に「拾玉集異本」と書いてある。

4、多賀宗隼「校本拾玉集」（昭46）による。

5、尊円・慶運については、岡中富士子「慈鎮和尚及び拾玉集の研究」に論考がある（昭49）。慶運については、石田吉貞「頓阿・慶運」（昭18）が詳しい。

6、この二十首は贈答歌でなく、七節で述べるように、五巻本等では本来の位置ではない。

7、拾玉集以前に慈円の家集がすでにあったであろうことは次のことからもいえる。

(イ)、五巻本巻三には「遺覚の本には」以下慈円の跋文がある。慈円自身の手で「本」といえるようなものがまとめられていたらしい。

(ロ)、百首歌のかなり多くは慈円の自序・跋文を備えているし、他にも詠歌事情等を示す詞書も詳しいものが多い。「拾玉集」として成立する以前に、恐らく自撰の慈円家集はかなり整理された段階にまで成っていたことが窺える。

(ハ)、「夫木和歌抄」（一三〇九頃）の慈円の歌の詞書に「御集」「家集」とある。

8、石川一氏は「正本」と「校本」は同じとされる。「青蓮院本拾玉集の成立について」和歌文学研究四十号（昭54）。

なお参考のため、青蓮院本の書入と五巻本（青蓮院本）・七巻本（歌学大系本）田村本との異同数を掲げておく。

青蓮院本の校合書入の種類 / 対校した本	校本	みせ消ち	イ	何も記号がないもの	その他
青蓮院本のみと書入が独自である数	21	14	11	20	「御本」1
田村本のみと書入が一致する数	24	12	6	25	「校証本」1
七巻本のみと書入が一致する数	29	31	6	2	
田村本・七巻本と書入が一致する数	45	74	10	13	「流」1

9、五巻本・七巻は実際には百五題、田村本は百二題ある。

10、青蓮部本と青蓮院本はひじょうに近い関係にあるが、どちらかがもう一方を写したという関係ではない。なおそのことは「私家集大成、中世I」の慈円解題（藤平春男）に詳しい。

11、第六群の初め（一七一四番）は五巻本に比べてみると中途の所から始まっているように見えるが、この辺りは雑多な歌を並べている所であるので、田村本の初めが区切りの良い所なのか、あるいは本来続いている所の中途から書かれているのかは分らない。なおこの観点からは五群と七群はまとめてみている。

12、五巻本の成立の方が早いとの見解は、岡中富士子氏（前掲書）、藤平春男氏（前掲書）、七巻本を先行させるのは久曽神昇氏（前掲論文）である。

原音声調から観た日本書紀音仮名表記試論

高山倫明

一、はじめに

『日本書紀』（養老四年＝七二〇年、舎人親王等撰。以下、書紀と略称する）の歌謡・訓注を記す一字一音式の音仮名は、原則として新来の西北方音（いわゆる漢音）を背景に成り立っていると言われ、再構中古漢語音との関連でこれまでにも多くの上代語音韻研究に利用されて来た。しかし、従来、音仮名の漢字原音といえば専ら狭義の音韻のみが問題にされ、各字音にかぶさっていたはずの声調についてはさほど注意が向けられていなかったようである。

漢語のアクセント型形成にその漢字の原音声調が関与したという指摘もあるように[注1]、漢字音摂取の当初においては、声調のごとき超分節的要素も、字音を構成する有機的成分として把握され受け入れられて来たようであり、また、平安時代の中央の知識層が漢字音を原音にかなり忠実に——その声調をも含めて——学習・伝承して来たことは、今に残る多くの文献資料の教えるところである。

さて、そのような時代下において、書紀述作者が漢字音を利用して日本語を書き記す際、各字音の声調をどのように処理したであろうか。捨象したか、あるいはそれなりの機能（＝日本語を記すにあたっての）を負わせたか、興味の存するところである。

以下、具体的な作業を通じて、書紀音仮名の原音声調に書紀述作時の日本語のアクセントの反映がないものかどうか、その可能性について考察を試みようと思う。

二、作業方針の概略

次のような方法をもって、音仮名の原音声調とアクセントとの相互の関連の有無を探ってみることにする。

①書紀の音仮名は、歌謡及び訓注のものに限ることにする。

②それら音仮名の背景となる漢字音を、ひとまずすべて中古漢語音（あるいはその直系としての漢音）と仮定し、各音仮名の原音声調を「広韻」によって決定する。

③右で決定された各音仮名の声調（調類）の、文字列中における配置と、その文字列の平安時代におけるアクセントとを、視覚的・平面的に比較対照させる。

④平安時代アクセントの資料としては、声点の施された同一の文

字列が、容易に、しかもより多く用意できるところの、日本書紀古写本を代表として使用する。

以下に作業の詳細を説明する。

二1　音仮名原音の声調

書紀音仮名として用いられた個々の漢字が、中国原音でどの調類に属する声調をもっていたかを「広韻」[注2]によって決定する。この際書紀述作時期と、中古漢語音（隋・唐時代の中国語音）の声調の陰調陽調分裂時期との先後が気になるが、ここでは一応原音声調を四声の体系として考えておく。[注3]

作業用底本には、大野晋氏『上代仮名遣の研究』後篇「日本書紀歌謡及び訓注語彙総索引」の本文篇を用いたが、次の箇所に改修を加えた。

- ○第3番歌謡　菟→兎　　○第74番歌謡　絶→絶
- ○第5番歌謡　劉→鄧　　○第102番歌謡　河→訶
- ○巻一訓注　醜女此之志許賣→醜女此云志許賣
- ○巻三訓注　片立此伽哆哆知→片立此云伽哆哆知
- ○第122番歌謡（斉明紀童謡）は未だ定訓を見ない難訓歌なので、考察の対象から除外する。
- ○訓注は「……此云――」の形式を備えているもののみを認め、それ以外のものは考察の対象から除外する。ただし、右に改めた二つの訓注と「……此曰――」「「……此謂――」「「……此言――」の形式のもの（各一列ずつ）は除外しない。

書紀音仮名中には「広韻」に見えない漢字がいくつかあるが、それらについては次のような処置をとる。

- ○駄――駄の異体とみなす。
- ○邪――揶と同音とみなす。
- ○賦――賦の誤りとみなす。
- ○勾――句の俗字。
- ○約――右に準じ、約の俗字とみなす。
- ○弖――氐の俗字とみなす。
- ○咩――巣韻の紙韻、馬韻に見えるが、紙韻とする。
- ○攞――巣韻に拠り、歌韻、智韻とする。
- ○茸――広韻に見えるが、書紀音仮名としては耳と同音であるとみなす。[注4]
- ○遷――遷の異体とみなす。
- ○嵯――嗟と同音とみなす。
- ○喇――利と同音とみなす。
- ○尋――碪と同音とみなす。

また、「広韻」の複数箇所に同一の漢字が現れることがある。つまり複数の語形をもつ漢字があるわけだが、それらは次の三種に分けられる。

Ⅰ、同じ調類に属し、音節構造のみ異なるもの。

例　野 ①上声（馬韻）羊者切〔yɨa〕[注5]
　　②上声（語韻）承與切〔ɜiɔ〕

Ⅱ、調類・音節構造ともに異なるもの。

例　易 ①去声（寘韻）以豉切〔yiɛ〕
　　②入声（昔韻）以益切〔yiɐk〕

Ⅲ、調類を異にするが、音節構造は等しいもの。

例　瑳 ①平音（歌韻）七何切〔tsa〕
　　②上声（哿韻）七可切〔tsa〕

これらのうち、Ⅰの場合は調類が等しいのでさしあたり問題とはならないが、日本語のどの音節をあらわすために用いられた音仮名であるかを考慮すれば、自ずから一方に決定されることになる。Ⅱの場合、調類が異なるが音節構造も異なるので同様にして一方に決定することが可能である。Ⅲの例の音仮名でいえば、それぞれ「ヤ」「イ」を示すためのものであることから、ともに①の方の字音を背景としていることがわかる。問題はⅢの場合である。調類が異なるが、音節構造が等しいので、書紀述作者が、その音仮名の原音にどちらの声調をかぶせて認識していたものか、容易には決定し難い。そこで、可能性を等しくする調類は、ひとまずすべて採ることにする（後載の日本書紀音仮名声調表参照）。ただし、実際の比較対照に際しては、便宜的に一方をとりあげ、必要に応じて他の可能性を注記の形で示すことにする（後述）。

二2　日本書紀古写本の声点

周知のように、平安時代後期は豊富なアクセント資料に恵まれ、かなりの精確度をもってアクセント体系の再構されている時代であるが、書紀古写本の中にも歌謡や訓注の部分に声点を施してそのアクセントを表示しているものが多く、すでに諸家によって資料として活用されている。

今、この、声点所載の書紀古写本をもって、平安後期のアクセント資料を代表させることにする。作業に用いた古写本は次のとおりである（いずれも複製本に拠る）。

①岩崎本（平安中期）――巻二十二、二十四
②前田家本（平安後期）――巻十一、十四、十七
③図書寮本（院政期）――巻二、十二〜十七
　巻二十一〜二十四
④北野神社本
　第一類（院政初期）――巻二十二〜二十七
　第二類（鎌倉時代）――巻二十八〜三十
　第四類（室町後期）――巻三、六、十一
⑤鴨脚本（鎌倉中期）――巻二
⑥弘安本（鎌倉中期）――巻一、二
⑦乾元本（鎌倉後期）――巻一、二

①②③……大阪毎日新聞社『秘籍大観』（大正15）
④……貴重図書復製会（昭和16）
⑤……古典保存会叢書（昭和16）
⑥……赤松俊秀編・宝蔵館（昭和46）
⑦……天理図書館善本叢書『古代史籍集』（昭和47）

※（　）内は書写年代。岩波古典大系『日本書紀』（上）の諸本解説を参照した。

各写本間に書写年代の大きな開きがあるのが気になるが、種々の点から、声点も文字と同様に書写の対象であったことが明らかであり[注6]、また、表示されたアクセントの内容から見ても、いずれの写本も基本的に平安時代のアクセントを反映していると見てよさそうである。なお、一部の写本には六声の体系による差声がなされているようであり、若干数の平声軽点が見出される。

二3　比較の方法

歌謡・訓注の個々の音仮名に施された声点と、その音仮名の原音声調とを視覚的に比較対照させるわけであるが、ここで注意を要するのは、声点における「平」「上」「去」が調値の呼称であるのに対し、「広韻」によって定めた原音声調の「平」「上」「去」が調類の呼称である点である。以下、古写本声点の「平」「上」「去」

及び「平軽」を次のように改めて呼ぶことにする。

1声点――平声点――低平調
2声点――上声点――高平調
3声点――去声点――上昇調
f声点――平声軽点――下降調

さて、先ず古写本の声点のうち、1声点に左傍線、2声点に右傍線を施す。稀に3声点、f声点が現れるが、2声点と同様、右傍線を施す。つまり、低平調と非低平調との二元に対立させるわけである。

次に、原音声調については、平声に左傍点、上声及び去声に右傍線を施す。つまり、いわゆる平仄の二元に対立させたうえで、平声を1声点に、仄声を2声点（3声点・f声点）に仮りに対照させてみたわけである。なお、入声に属する音仮名もどくまれに現れるが分類の基準が他と異なるので傍線は施さないことにする。

さて、複数の声調を有する音仮名の場合、複数の声調が仄声同士であれば当面の問題とはならないが、平仄にまたがるときには傍線が左右入れかわることになる。そこで、比較の際には一方の声調のみをとりあげて傍線を施すが、左右の入れかわる可能性のある場合はその旨を注記することにする。声調の選択は漢字の意義を参照し、中国に於て使用頻度が高いと思われる単語の方の声調を採ることをもって一応の原則とした。[注7] 方法に限界があり、結果的に任意の選択となった場合が多いが、一旦選んだ声調は全巻統一とし、その音仮名の現れるたびにその都度傍線の左右を動かしたりすることはない。

以上のような規準をもって、古写本声点と音仮名原音声調の両者に左右傍線を施し、音仮名の連続がそこに現出させる二つの傍線の凹凸を比較対照させる。つまり、両者の傍線を個々の音仮名について吟味するのではなく、文字連続が作り出す二つの凹凸パタンを、細部にとらわれることなく、動的に眺めてみようというわけである。例えば、次のように。

伊弩毛夜絹餓岐
平上平去去平↑――音仮名の原音声調
1 2 1 2 2 1 2↑――古写本の声点

三　比較の結果

さて、この作業の結果、次のような現象が観察された。

(1)一部の歌謡・訓注において、両者の凹凸に偶然にしては不自然な類似が見出される。例えば次のようなものがそれである。

▼哆哆奈梅弖　伊那瑳能椰摩能　虚能斯由毛
上上去平平　平平平平平平　平平上平平
1 1 2 1 2　1 1 1 1 1 1 1　1 1 2 1 1

易喩耆摩毛羅毗　多多介陪磨　和例破椰餓怒
去去平平平平　平平去平平　平去去平上
1 2 1 1 1 2 1　1 1 2 1 1　1 2 2 1 2

▼伊磨紀那慶　平武例我禹杯爾
平去上去上平上
1 2 2 1 。　2 2 2 2 2 1 2

倶謀娜尼母　旨屢倶之多多婆　那爾柯那能柯武
平平上平上　上去平平平平上　平上平平平上
1 1 2 1 1 1　2 1 1 1 2 1　1 2 1 1 1 2

▼倶穢簸邏箇須
平去上去去平
1 2 2 2 2 2 1
（巻一・訓注）

▼浮枳于都屢伊浮枳能佐擬理
平上平去平平去上上
1 2 1 1 2 1 1 1 2 2 2
（巻一・訓注）

▼羽企爾磨梨陁毗運而陁陁志
上去上去平平平去平平去
2 2 2 2 1 1 1 2 2 1 1 2
（巻二・訓注）

▼都盧耆能多伽瀰屠利辞魔屢
平平平平平平去平平去
1 1 1 1 1 1 1 1 2 1 1 2
（巻三・訓注）

※左側に・印を付した音仮名については傍線の入れ代わる可能性がある。
※声点の部分、数字の代りの。印は、使用した古写本のその箇所に声点のなかったことを示す。

(2)それらの歌謡は、一部の巻々に偏在する傾向を見せる。（訓注については、今のところはっきりしたことが言えない。以下、論を専ら歌謡に限ることにする。[注8]）

(3)それらの歌謡が偏在する巻々と、それ以外の諸巻との境界線が、いわゆる書紀区分論によって示された諸巻の分割線と大

平平平上去　上去去去上去　平上去平去平上
1 1 1 1 2 2　2 2 2 2 。 2 1　1 2 2 1 2 1 1
（巻二・歌謡番号12）

▼伊波能杯儞　古佐屢巣梅野倶
平平平上　上去去平平上平
2 1 1 1 1 2　2 2 2 1 1 2 1
（巻二十四・歌謡番号107）

巣梅多儞母　多礙底騰哀囉栖　歌麻之之能烏賦
平平平上上　平去上平平平　平平平平平去
1 1 2 1 1 1　1 2 2 1 1 1 f　1 1 1 1 1 2 2
（巻二十四・歌謡番号109）

▼波魯波魯爾　巣騰曾枳舉喩屢　之麻能野父播羅
平平上上　平平平上上去去　平平平上上去平
1 2 1 1 2 2　1 1 f 2 2 2 2 1
（巻二十四・歌謡番号110）

▼烏智可梅能　阿娑努能枳々始　騰余謀佐儒
平去上上平　平平上平上上　平平平去平
2 2 2 2 2　1 1 2 1 2 2 2　1 1 1 2 1
倭例播禰始柯騰　比騰曾騰余謀須
平去去上上平　上平平平平
1 2 2 2 2 1 1　2 1 f 1 1 1 2

休において重なりあう。今、傍線の位置の一致率を歌謡ごとに見てゆけば次表のようになる。

巻数	歌謡番号	傍線一致率	日本書紀区分論 A	B	C	D
一	1	●			I・II併合	β
二	2 3 4 5 6	○ ○ ○ ○ ○				
三	7 8 9 10 11 / 12 13 14	◎ ● ◎ ○ ● / ● ○ ●				
五	15 16 17 18 19 / 20	× × × × × / ×				
七	21 22 23 24 25 / 26 27	× × × × × / ×				
九	28 29 30 31 32 / 33	× × × × × / ×				
十	34 35 36 37 38 / 39 40 41	× × × × × / × × ×				
十一	42 43 44 45 46 / 47 48 49 50 51 / 52 53 54 55 56 / 57 58 59 60 61 / 62 63	◎ ○ ○ ○ ◎ / ○ ○ ○ ◎ ○ / ○ ○ ○ ◎ ○ / ○ ○ ○ ◎ ○ / ○ ○ ○ ◎ ○				
十二	64	○				
十三	65 66 67 68 69 / 70 71 72 73	○ ○ ○ ○ ○ / ○ ○ ○ ○ ○				
十四	74 75 76 77 78 / 79 80 81 82	○ ○ ○ ◎ ○ / ○ ○ ○ ● ○				
十五	83 84 85 86	◎ ○ ○ ○				
十六	87 88 89 90 91 / 92 93 94 95	○ ○ ○ ● ◎ / ○ ○ ○ ● ○				
十七	96 97 98 99	○ ○ ◎ ◎				
十九	100 101	× ×				
廿二	102 103 104	○ ○ ○				
廿三	105	○				
廿四	106 107 108 109 110 / 111 112	◎ ◎ ● ● ● / ◎ ●				
廿五	113 114 115	◎ ● ●				
廿六	116 117 118 119 120 / 121 122 123	● ● ○ ○ ● / ● ○ ●				
廿七	124 125 126 127 128	◎ ○ ○ ◎ ○				

※傍線一致率
○＝70％未満。◎＝70～79％　●＝80％以上。
×＝声点所載の古写本複製がなく、未調査。

※書紀区分論
A＝岩波古典大系「日本書紀」解説。
B＝太田善麿氏「古代日本文学思潮論Ⅲ――日本書紀の考察――」第二章「日本書紀の部分的徴候」
C＝西宮一民氏「日本上代の文章と表記」Ⅱ部2「日本書紀の仮名と巻々の成立」
D＝森博達氏「〈日本書紀〉歌謡における万葉仮名の一特質――漢字原音より観た書紀区分論――」（「文学」四五・二）

さて、以上のような結果から、どのような結論が導かれ得るであろうか。

先ず、(1)に示したような、偶然らしからぬ凹凸の類似を見せる文字列が観察されたことが、第一の収穫であるが、全体から観て、その量の僅少である点が残念である。ただし、その量的不足をもってその現象を「偶然」のなせる業と見なすことはできそうにない。(2)(3)に示したように、それら少数派が特定の巻々に偏在する傾向を見せるからである。書紀が決して一元的に成立したものではなく、巻巻によって述作者や述作時期が違っていたであろうということは、これまでに様々な観点から試みられて来た書紀区分論の教えるところであり、ある巻々への偏在はその点で大きな意味を持つ。巻を単位に考えるならば、先のごとき現象は――それをその巻の表記態度と見なして差支えない程度に――高い比率をもって観察されるのである。しかも、五音節句あるいは七音節句の凹凸が完全に一致する確率を考慮したうえで、例えば先に示した109番歌謡などを見ると、そこに「偶然」の介在する余地は先ずないと考えざるを得ない（ほう）（同様の傾向を見せる歌謡群中にあって、109番歌謡のごときものが一典型として存在することの意味は大きい）。

さて両者の凹凸の類似に何らかの因果関係を想定するとなれば、一方の古写本声点に基づく凹凸が、大雑把であるにせよ平安時代のアクセントを規準として作図されたものである以上、他方の凹凸にもアクセントの反映を考えるのが、この場合最も自然であろう。

以上のことから判断し、本稿の一応の結論を述べるならば、

Ⅰ日本書紀音仮名表記部分の一部、ことに巻三、巻二十四～巻二十七の歌謡においては、音仮名連続における原音声調の配置に、書紀述作時の日本語のアクセントが反映している可能性がある。

Ⅱその表記部分においては、日本語の低平調の音節に原音声調が平声の調類に属する漢字を、高い部分を有する音節に原音声調が上声・去声の調類に属する漢字を宛てた可能性がある。ということになる。古くより日本語のアクセントに多く注意の払われて来たことは、今に残る数々のアクセント資料の教えるところである。就中、書紀と同時成立の「古事記」に若干の声注が存し、また、厳密にはやや性格を異にするが「金光明最勝王経音義」和訓にアクセントによる音仮名の使い分けが存することなど、右の可能性を考える際の一応の参考となるだろう。いずれにせよ、現段階では「可能性」の指摘に踏みとどまらざるを得ないが、本稿に見た一応の結論は、今後へ向けての作業仮説としては有効かと思う。

四　おわりに

最後に、書紀区分論との交渉をもう一度ふりかえっておきたい。ここで興味深いのは、Dの森博達氏による区分との関連である。森氏は、書紀歌謡が音仮名とその漢字原音との対応状況の差異によって二群に分割できるとし、一をα群、一をβ群と命名された（前掲表参照）。そして、β群に日本的漢字音を背景とする音仮名が少なからず含まれているのに対し、α群の音仮名は原則として漢字原音（唐代北方音）を背景に成り立っている、と結論されたのである。先の表を見ると、凹凸に類似を見せる歌謡が、巻三を除いて、多くα群に属していることがわかる。つまり、多少なりとも和化を被った字音にではなく、中国原音に基づいた音仮名で記された部分に、

い現象が多く現れているということである。巻三の解釈が問題として残るにせよ、このことは、先の現象がα群の表記態度（あるいは表記方針）と平行的に把握し得ることを暗示しているように思う。また、本稿の結論Ⅱのごときは、あるいは中古漢語音声調の調値を考える際の一助となる可能性を秘めているとも言えようか。

なお、本稿の作業では、個々の音仮名の声調決定をみな「広韻」に拠って行なった。α群とβ群との関連は、あるいはこの作業方針とも無関係でないかも知れない。[注10] 後考を期したいと思う。作業過程において残して来た問題も少なくない。[注11] 諸賢の御批正を賜われば幸いである。

注

1、金田一春彦「日本四声古義」（『国語アクセント論叢』）
奥村三雄「漢語アクセントの一性格」（『国語国文』33－2）

2、藝文印書館印行『校正宋本廣韻附索引』を使用。

3、小松英雄『国語史学基礎論』322頁の記述など、この場合の参考になろうか。

4、岩波古典大系『日本書紀』巻頭頁参照。

5、推定中古音は藤堂明保氏に拠る。

6、たとえば、一文字に二種の声点を差し、各々にその出所を注記する写本がある（乾元本など）。また、前田家本と図書寮本は同系統の写本だが、図書寮本の声点は明らかに前田家本（系統）のそれを写したものである。

7、注3文献頁の記述などを参考にした。

8、例に出した訓注の他にも、注目すべき訓注は多い。ただ、訓注には音節数の少ないものが多いうえ、訓注そのものが巻によって著しく偏っていて、注目すべき訓注同士の脈絡が殆としてとらえ難いのが残念である。後考をまちたいと思う。なお、歌謡と訓注の音仮名の質的な相違がしばしば説かれている。ここで歌謡と訓注を切り離して考察を進めることは、方法として是認されるであろう。

9、ちなみに、すべての音節に平仄二種の音仮名が用意されていると仮定すれば、五音節句の作り得る凹凸の型は32通り、七音節句では128通りもある。

10、書紀音仮名に呉音系の字音に基づくものの混じていることは諸家の説くところである。周知のように、呉音と漢音とでは声調を一律に扱うことはできない。この点ことにβ群においては再考を要するであろう。

11、たとえば本稿では書紀古写本声点を一様に平安時代のアクセント資料として扱って来たが、数次の書写を経て声点の曖昧になっているものもあり、各写本の資料的信頼性について詳細な吟味が必要のようである。ただ、現段階において心強いのは、岩崎本日本書紀の存在である。巻二十二、二十四の二巻しかないが、訓点を加えた最古の書紀古写本で、その加点態度にも従来から大きな信頼の寄せられているものである。両巻とも同筆とおぼしき差声（朱第一点）がなされているが、β群に含まれる巻二十二とα群に含まれる巻二十四とで本稿での作業結果が著しく異なるうえ、巻二十四が最も顕著に凹凸の類似を見せる巻であった点、注目に値しよう。なお、両巻の歌謡数に開きがあるが、巻二十二の三首はいずれも長歌謡であり、音仮名ののべ数は両巻ほぼ同数である（巻二十二－歌謡11・訓注4、巻二十四－歌謡15・訓注15）。

日本書紀音仮名声調表

※最上段に書紀の音仮名を記す。以下順に、調類・韻目・歌謡中の使用のべ回数・訓注中の使用のべ回数を記す。

※訓注のみに見える音仮名については右傍に・印を施した。また作業用底本において、訓注のみに見える訓み方をされた音仮名には○印を施した。

あ	阿	平	歌	117
秋・上	舸	上	哿	8
養		平	歌	2
0				21
3				

い	伊	平	脂	82
怡・平	易	去	寘	18
之	以	上	止	14
0	2	0	3	2
4	0			15

う	于	平	虞	42
羽・去	汙	平	虞	1
上	扈	上	麌	3
遇	禹	上	麌	4
麌	杼	上	語	18
0	字	上	麌	12
2	0	0	0	14
				20

え	愛	去	代	2
埃・平	哀	平	咍	0
咍	京	平	哈	0
0	兮	平	齊	2
1	2			0

お	於	平	魚	53
憶	飫	去	御	19
乙	淤	平	魚	2
入	去	平	魚	9
職	御		魚	
1	1		1	
0	0		1	

か	加	平	麻	41
迦・平	可	上	哿	8
麻	何	平	歌	13
0	阿	平	歌	42
1	河	平	歌	18
	何	上	哿	14
	柯	上	哿	12
	何	去	箇	2
	賀	去	箇	38
	介	去	怪	27
	箇	去	箇	38
	賀	上	哿	15
	何	平	歌	14
	阿	平	歌	18
	柯	平	歌	2
	何	平	歌	2
	何	上	哿	12
	何	去	箇	2
	賀	去	箇	38
	介	去	怪	27
	箇	去	箇	38
	賀	上	哿	15
	何	平	歌	14
	阿	平	歌	18
	柯	平	歌	42
	何	平	歌	2
	何	上	哿	12
	何	去	箇	2
	賀	去	箇	38
	介	去	怪	27
	箇	去	箇	38
	賀	上	哿	15
	何	平	歌	14
	阿	平	歌	18
	柯	平	歌	42
迦・平	可	上	哿	8
麻	加	平	麻	41
0	何	平	歌	13
1		上	哿	12
		去	箇	2
		平	歌	2
		上	哿	14
		去	箇	38
		去	怪	27
		去	箇	38
		上	哿	15
		平	歌	14
		平	歌	18
		平	歌	42
麻	加	平	麻	41
0	可	上	哿	8
1	何	平	歌	13
		去	箇	2
		平	歌	2
		上	哿	12
		去	箇	2
		去	箇	38
		去	怪	27
		去	箇	38
		上	哿	15
		平	歌	14
		平	歌	18
		平	歌	42
麻	迦・平	平	麻	63
0	我	上	哿	40
1	娑	平	歌	3
	賀	去	箇	38
	介	去	怪	27
	箇	去	箇	38
	賀	上	哿	15
	何	平	歌	14
	阿	平	歌	18
	柯	平	歌	42
麻	迦・平	平	麻	63
0	我	上	哿	40
1	娑	平	歌	3
	賀	去	箇	38
	介	去	怪	27
	箇	去	箇	38
	賀	上	哿	15
	何	平	歌	14
	阿	平	歌	18
	柯	平	歌	42

き(甲)	企	去	寘	22	91
吉	祁	平	脂	15	24
入	棄	去	至	1	3
質	祇	平	支	0	18
1	耆	平	脂	0	16
0	祁	上	旨	1	1
	伎	上	紙	3	13
	企	上	寘	22	91
	岐	平	支	24	91
	祁	平	脂	82	
吉	祁	平	脂	82	
入	棄	去	至	1	3
質	祇	平	支	0	18
1	耆	平	脂	0	16
0	企	上	寘	22	91
	岐	平	支	24	91
	祁	平	脂	82	
棄	伎	上	紙	3	13
去	企	上	紙	1	1
至	祁	上	旨	1	1
1	棄	去	至	1	3
0	耆	平	脂	0	16
	企	上	寘	22	91
	岐	平	支	24	91
	祁	平	脂	82	
棄	伎	上	紙	3	13
去	企	上	紙	1	1
至	祁	上	旨	1	1
1	棄	去	至	1	3
0	耆	平	脂	0	16
	企	上	寘	22	91
	岐	平	支	24	91
	祁	平	脂	82	

き(乙)	紀	上	止	14
規・平	既	去	未	3
支	基	平	之	4
0	己	上	止	1
1	気	去	未	2
	幾	平	微	1
	機	平	微	1
	気	去	未	2
	基	平	之	4
	紀	上	止	14
規・平	既	去	未	3
支	基	平	之	4
0	己	上	止	1
1	気	去	未	2
	幾	平	微	1
	機	平	微	1
	気	去	未	2
	基	平	之	4
	紀	上	止	14
疑・平	擬	上	止	9
之	祇	平	支	0
4	耆	平	脂	0
0	疑	平	之	4
2	擬	上	止	9
	祇	平	支	0
	耆	平	脂	0
疑・平	擬	上	止	9
之	祇	平	支	0
4	耆	平	脂	0
0	疑	平	之	4
2	擬	上	止	9
	祇	平	支	0
	耆	平	脂	0

く	倶	平	虞	42	52
区・平	矩	上	麌	28	
虞	区	平	虞	2	11
0	句	去	遇	11	14
1	勾	平	侯	2	6
	句	平	遇	1	2
	玖	上	有	4	6
	久	上	有	2	2
	屈	去	迄	2	2
	約	去	薬	1	0
	倉・上	上	厚	0	1
	竄・上	上	旱	0	1
	苦・去	上	有	0	2
		去	暮		
倶	区	平	虞	42	52
区・平	矩	上	麌	28	
虞	句	去	遇	11	14
0	勾	平	侯	2	6
1	句	平	遇	1	2
	玖	上	有	4	6
	久	上	有	2	2
	屈	去	迄	2	2
	約	去	薬	1	0
	倉・上	上	厚	0	1
	竄・上	上	旱	0	1
	苦・去	上	有	0	2
		去	暮		
具	倶	平	虞	42	52
去	区・平	平	虞	4	
遇	愚	平	虞	4	8
2	思	平	之	0	2
1	遇	去	遇	2	2

け(甲)	計	去	霽	2	18
家	啓	上	薺	1	1
平	鄎	平	脂	0	1
麻	稽	平	斉	4	18
1	兮	平	斉	2	1
0	鶏	平	斉	4	18
	家	平	麻	1	1
	計	去	霽	2	18
	雞	平	斉	4	18
	啓	上	薺	1	1
	鄎	平	脂	0	1
	稽	平	斉	4	18
	兮	平	斉	2	1
	鶏	平	斉	4	18
見・平	家	平	麻	1	1
去	計	去	霽	2	18
平	雞	平	斉	4	18
斉	啓	上	薺	1	1
0	鄎	平	脂	0	1
1	稽	平	斉	4	18
	兮	平	斉	2	1
	鶏	平	斉	4	18

け(乙)	閉	平	齊	4	9
成	賛	去	霰	1	7
去	祭	去	祭	1	4
怪	世	去	祭	1	3
1	制	去	祭	1	4
0	勢	去	祭	1	7
	誓	去	祭	1	9
	閉	去	霽	4	9
	賛	去	霰	1	7
	祭	去	祭	1	4
	世	去	祭	1	3
	制	去	祭	1	4
	勢	去	祭	1	7
	誓	去	祭	1	9
閉	閉	去	霽	4	9
去	賛	去	霰	1	7
霽	祭	去	祭	1	4
1	世	去	祭	1	3
0	制	去	祭	1	4
	勢	去	祭	1	7
	誓	去	祭	1	9
閉	閉	去	霽	4	9
去	賛	去	霰	1	7
霽	祭	去	祭	1	4
1	世	去	祭	1	3
0	制	去	祭	1	4
	勢	去	祭	1	7
	誓	去	祭	1	9

け(乙)	開	平	咍	7	9
閉	愷	上	海	1	1
去	概	去	代	1	1
霽	既	去	至	1	4
1	気	去	未	4	7
0	試	平	咍	7	9
	開	平	咍	7	9
	愷	上	海	1	1
	概	去	代	1	1
	既	去	至	1	4
	気	去	未	4	7
	試	平	咍	7	9
閉	開	平	咍	7	9
去	愷	上	海	1	1
霽	概	去	代	1	1
1	既	去	至	1	4
0	気	去	未	4	7
	試	平	咍	7	9
	開	平	咍	7	9
	愷	上	海	1	1
	概	去	代	1	1
	既	去	至	1	4
	気	去	未	4	7
	試	平	咍	7	9

け(乙)	祁	平	脂	15	24
閉	棄	去	至	1	3
去	祇	平	支	0	18
霽	耆	平	脂	0	16
1	企	上	寘	22	91
0	岐	平	支	24	91
	祁	平	脂	82	
	伎	上	紙	3	13
	企	上	紙	1	1
	祁	上	旨	1	1
	棄	去	至	1	3
	耆	平	脂	0	16
	企	上	寘	22	91
	岐	平	支	24	91
	祁	平	脂	82	
棄	伎	上	紙	3	13
去	企	上	紙	1	1
至	祁	上	旨	1	1
1	棄	去	至	1	3
0	耆	平	脂	0	16
	企	上	寘	22	91
	岐	平	支	24	91
	祁	平	脂	82	
棄	伎	上	紙	3	13
去	企	上	紙	1	1
至	祁	上	旨	1	1
1	棄	去	至	1	3
0	耆	平	脂	0	16
	企	上	寘	22	91
	岐	平	支	24	91
	祁	平	脂	82	

こ(甲)	古	上	姥	37
固・去	故	去	暮	6
暮	固	去	暮	6
0	姑	平	模	5
1	胡	平	模	3
	顧	去	暮	1
	孤・平	平	模	0
	僧			2
固・去	故	去	暮	6
暮	固	去	暮	6
0	姑	平	模	5
1	胡	平	模	3
	顧	去	暮	1
	孤・平	平	模	0
	僧			2
呉	誤	去	暮	6
平	悟	去	暮	2
模	吾	平	模	1
1	娯	平	模	1
0	古	上	姥	37
	故	去	暮	6
	固	去	暮	6
	姑	平	模	5
	胡	平	模	3
	顧	去	暮	1
	孤・平	平	模	0
	僧			2
呉	誤	去	暮	6
平	悟	去	暮	2
模	吾	平	模	1
1	娯	平	模	1
0	古	上	姥	37
	故	去	暮	6
	固	去	暮	6
	姑	平	模	5
	胡	平	模	3
	顧	去	暮	1
	孤・平	平	模	0
	僧			2

こ(乙)	虚	平	魚	34
挙・上	許	上	語	16
語	挙	上	語	14
3	居	平	魚	7
4	据	去	御	6
0	擒	去	御	4
2	去	去	御	3
	巨	上	語	5
	渠	平	魚	4
	去	去	御	3
	虚	平	魚	34
	許	上	語	16
	挙	上	語	14
	居	平	魚	7
	据	去	御	6
	擒	去	御	4
御	去	去	御	3
去	巨	上	語	5
御	渠	平	魚	4
1	去	去	御	3
0	虚	平	魚	34
	許	上	語	16
	挙	上	語	14
	居	平	魚	7
	据	去	御	6
	擒	去	御	4
御	去	去	御	3
去	巨	上	語	5
御	渠	平	魚	4
1	去	去	御	3
0	虚	平	魚	34
	許	上	語	16
	挙	上	語	14
	居	平	魚	7
	据	去	御	6
	擒	去	御	4

大・	黛	歌		夢		袍	陀	多	
去	上	去	平	去	上	上	平	平	た
箇	箇	箇	歌	箇	哿	哿	歌	歌	
0	1	8		14		31	38	104	
1	0	0		4		6	16	27	

壮・	妝・	曹		装		奘		
上	上	平	去	平	去	平	去	上	さ
馬	寄	歌	宕	唐	陽	宕	部	
0	0	1		3		3		
2	1	0		0		1		

沙	娑	差	作	舎	左	佐	瑳	佐	
去	平	平	入	去	上	去	上	去	さ
麻	歌	麻	薬	馬	馬	箇	哿	箇	
1	1	1	2	3	5	10	13	59	
1	0	0	1	0	8	7	1	19	

俄・									
平	平	平							
歌	歌	歌	哿						
0	1	3	40	6					
1	0	5	8	4					

宮	遅	地	恥	致	知	智	
平	平	平	去	去	平	去	ち
之	脂	支	至	至	支	寘	
1	1	2	2	9	24	31	
0	0	0	0	1	9	5	

賞・	膏・	自・	兒	貳	耳	餌	士	耳	
上	上	去	平	去	上	去	上	去	じ
止	紙	至	支	至	止	志	止	志	
0	0	0	1	1	1	1	2	5	
2	1	1	0	0	0	2	0	0	

師・	茲・	置・	伺	祠	試	尸	指	司	持	時	芝	貲	伺	旨	思	嗣	梔	矢	始	斯	辞	志	之	
平	平	上	去	平	去	去	平	上	平	平	平	平	平	去	平	上	去	平	上	上	平	平	去	平	し
脂	先	紙	志	之	至	志	脂	旨	之	之	之	之	脂	志	之	旨	志	之	志	文	旨	止	文	之	
0	0	0	1		1	1	1	1	1	1	1	1	3	3	3	4	5	8	8	18	25	48	52	71	
1	2	2	0		0	0	0	0	0	2	2	2	0	0	1	0	0	0	0	1	8	3	13	17	

伎・	徽・	管・	蛾	釈	娘				
上	平	平	平	平	上	上			し
紙	支	支	脂	脂	紙	紙			
0	0	0	1	1	3	1			
5	1	1	0	0	0	1			

疑									
平	上								
之	止								
4	9								
0	2								

徒・	頭・	図・	逗	根	屠	途	豆	部	荒	
平	平	平	去	上	平	平	去	平	去	平	つ
模	侯	模	候	姥	模	模	候	模	暮	模	
0	0	0	1	1	1	1	1	50	54		
1	2	3	0	0	1	2	13	16	5		

受	誦	儒	
上	去	平	ず
有	送	虞	
2	12	17	
1	2	0	

主	秀	酒	周	殊	衆	輸	須	
上	去	上	平	平	去	去	平	す
麌	宥	有	尤	虞	送	遇	虞	
1	1	1	3	4	4	13	49	
0	0	1	0	0	1	0	18	

紙・	具	息	廚						
平	去	平	平	去					
虞	遇	虞	虞	遇					
2	2	2	4	13					
0	1	2	0	0					

屠	締	帝	提	堤	当	丁	底	
去	去	去	平	上	平	平	上	て
青	斉	霽	斉	斉	斉	斉	斉	
1	1	1	2	4	11	22	27	
0	0	0	0	0	0	0	2	

噴	盆	
去	去	ぜ
糸	糸	
1	1	
0	0	

是・	則	栖	細	西	世	制	斉	勢	
上	去	去	平	去	平	去	去	去	平	去	せ
紙	職	霽	斉	霽	斉	祭	祭	霽	斉	祭	
0	1	3		3	5	5	8	9	11		
2	0	0		0	0	1	1	0	1		

究・									
去									
青									
0									
1									

号	報								
去	去								
代	代								
2	3								
0	2								

塗・	頭・	部	杜	徒	刀	度	図	拓	度	斗	
平	上	平	上	平	平	去	平	去	去	上	と(甲)
模	姥	模	姥	模	豪	暮	模	暮	暮	厚	
0	0	1	2	2	2	3	3	4	5	5	
1	1	0	0	0	1	0	1	1	1	3	

斯	廝	部	登	騰	吾	等	
平	平	去	平	平	平	上	と(乙)
登	登	嘏	登	登	哈	等	
1	2	4	15	27	35	72	
0	0	0	3	3	7	8	

蜂	序	叙	鋤	茹		
去	上	上	平	去	上	平	そ(乙)
恩	語	語	魚	御	語	魚	
1	1	1	1	2		
0	0	0	0	0		

訴	素	蘇	
去	去	平	そ(甲)
暮	暮	模	
1	5	8	
0	2	1	

則・	賊	所	楚	阻	阻	眉	曾	
入	入	上	平	去	平	平	平	そ(乙)
徳	徳	語	魚	嘏	登	登		
0	1	1	2	3	4	29		
1	0	0	0	0	0	3		

呉	語	吾							
平	去	平							
模	暮	模							
1	1	2							
0	0	1							

栗	取	語							
平	去	去	上						
魚	麌	御	語						
1	1	3							
0	0	1							